

基督春望

牧師 山本 護

春先が寒かったせいか、集会所裏のレント(四旬節)ローズが少し遅れてイースターローズとして咲いています。この生命あふれ出す季節には特有の憂いがある、とりわけ唐の詩人は春のメランコリーに敏感なようです。

高校の漢文で習った「国破山河在」で始まる杜甫の『春望(757年)』。「感時花濺淚(時ニ感ジテハ花ニモ涙ヲソソギ)／恨別鳥驚心(別レヲ恨ンデハ鳥ニモ心ヲ驚カス)」はいかにも春の歎き。漢詩に親しむ典雅はありませんが、井伏鱒二の超訳で高適(こうせき)の『田家春望(734年)』を知りました。「田家」とは高適が都落ちして住んだ田舎家のことでしょうか。



「出門何所見／春色滿平蕪／可歎無知己／高陽一酒徒」。井伏の訳は「ウチヲデテミリヤアテドモナイガ／正月キブンガドコニモミエタ／トコロガ会ヒタイヒトモナク／アサガヤアタリデオホザケノンダ」と意識の領域さえも逸脱しています。素直に読めば「家ヲ出テ何見リヤイイカ／野ッ原ニ春ガ満チテイルダケ／歎カワシヤ誰ニモ理解サレヌ／俺ハ高陽ノ飲ンダクレ」という自嘲的な感嘆詩です。ところが荻窪住まいの井伏は隣町の「阿佐ヶ谷あたりで大酒飲んだ」と、同じ自嘲でも自分の日々の引き寄せています。今や教会権威の拠り所となっている聖書。イエス御自身や井伏のように、権威をいくらか茶化して読むことも正統じゃないかと思えます。

「来見飲食吾／語大食酒徒(マタイ 11:19)／穴狐巢空鳥／無家枕基督(8:20)」。「何食オウガ飲モウガイチイチウルサイネ／神ノ恵ヲ喜ンデイルダケサ／狐ヤ鳥ハ家族ガアッテ大変ダヨ／基督ハセイセイスクライサミシイナ」。『基督春望』とでも名付けましょうか。唐詩人のメランコリーに倣ってイエスの言葉を五言絶句にし、井伏鱒二を手本にして読み下してみました。するどうでしょう。見知っていたイエスの姿がなんだか違って見えます。つまり「見知っている」という硬直が軟化したのでした。

春はいくらか危険な季節。温泉につかり考え事をしていて湯あたりするように、あふれる生命力にあてられて憂いに沈まぬように。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない(マタイ 8:20)」。キリストはさみしくとも、すがすがしい生き方をされました。私たちも春のエネルギーを貯め込まず、風(聖霊)が吹くままにこの身を通り抜けていただきましょう。Ω